

現代の親の風潮を批判する

樋口澄雄



一、風潮の根

人間は誰しも、世の中の大変革にであったとき、日常生活をおして、つぶさに、具体的に、ある「生き方」の姿勢を学びとるものである。そしてしばらくの間はその生き方の方向をとるのが常である。その誰しもが、大衆という形に拡大して同じ姿勢をとれば、それが「風潮」である。明治維新が、日本人のなかに「進取的」風潮をもたらしたのもその一つの例である。

ところで太平洋戦争の敗戦は、維新にも劣らないさまさまの姿勢を日本人に強いたし、その後の世界的状況や日本の経済的繁栄や技術革新による変革もさまさまの姿勢を生み出し生み出しつつある。

「現代の親」はそうしたなかに生きて来、生きている人たちである。したがってこうした変革の中で発見したあるいは強いられたい姿勢をとっている。いまその姿勢の中で「風潮」にまで高まったものを知るためにその根となつたいくつかの考え方の傾向をとりあげて「風潮」批判の第一段階を試みよう。

(一) 現実主義的思潮

現実主義は、わかりやすくいって、主義や理想にこだわらないで、現実の事態に即して事を処する考え方といつてよい。

戦前の日本主義、八紘一宇的理想が敗戦という現実のなかにもろくもついえ崩れるのを体験し、それにかわって、毎日の生活、というより生存といった方が適切かもしれないがその生存そのものに全力を注がなければならなかった苦難な体験、貨幣価値の激

変による現実に味わったきびしき、この異常な体験は、日本人のなかに強く「現実重視」の思潮を根づけた。

あるときは、剝那主義、享樂主義的でさえあると思われるような時代風潮をおこしたのである。これが現代の風潮理解の一本の柱かと思う。

(二) 実利主義的思想

デバートを公衆便所に利用する紳士があれば、一方デバートとは特売場とほん訳している実利主婦も少なくない。

合理主義は「近代」の特質をあらわす合言葉である。しかし、日本の庶民の生活のなかに浸透したのは戦後といつてよい。生活原則の民主主義と同じ比重をもって生活原理のプリンシプルとして合理主義は「くらし」のなかに入った。

しかもその方向は、生活原理というより、生活処理の原則として普遍化したとみた方がよいかもしれない。なぜなら、衣・住・交際などの生活原理にはしばしば不合理生活の馬脚をあらわすが、生活処理は合理的という名の実利主義がはばをきかしているからである。

特に消費面、もっと極言すれば「支払い」には敏感に実利主義が貫かれ出したといつてよい。「計算高い」とか「勘定高い」とか「チャッカリしている」とか「ドライ」など、この間の処世法

についての言葉がたくさん出現した。このことはそれ自体が実利的生活態度の現象、実証とみてよい。

このことも、現代風潮理解の柱である。

(三) 社会的同調心理—ひとまね心理

世の中の変動があつてもかわらないものもある。民族のなかに永い時と政治で骨のずいまでしみこまされ、生活様態がその考え方に傾きやすくなっているものである。

その一つに「みんながやるから」「みんなが買うから」「わたしも」「うちでも」の心、称して社会同調心理といつておこう。

木と紙の家屋、五人組、隣組の下部組織、日本の歴史は「家」の外まがら面重視に長い時をへてきた。「ひとのふりみてわが身をなかせ」の教訓はしばしば「ひとのふりみて、わたしもそうする」にすりかえられてきた。戦後版では「パスに乗りおくれは……」の合言葉にみえる。このように戦前も戦後も日本人は他人、一般社会の傾向に敏感に同調する傾向をもっている。流行の心理に共通したものであるが、単なる流行とちがって、村八分の歴史や孤立化の苦汁のなかに生まれ育ってきた同調である。それだからこそ一層深い問題なのだが。現代風潮の根の中でも古くからあつたもので根づよいものとしてとりあげたい柱である。

このほか、親の愛情表現の変化、現代版立身出世、消費生活の

根などあるが最も根底をなすものを以上の三つにしばって、つきは、その根から咲いた花ともいふべき主題の「親の風潮さまさま」について考えることにしよう。

二、風潮さまさま

(一) 子ども二人の核家族風潮

昭和四十年の全国統計は、核家族五六%を告げ、四人世帯二二%、独身、三人世帯ともに一七%、五人世帯一五%を示している。三人四人の世帯が全て子ども一人二人を示すとは限らないがおよその目安になる。したがってこの数字から推測して四〇%近い家が子ども一、二人であろうと思われる。

この実態を都市の小学校でみるとおよそ児童の五〇%が二人兄弟、二五%が一人っ子である。少数子家族七五%となるのである。

また次の調査はさらにその裏づけになる。日本家族計画連盟が既に二児をもうけている母親に「あと何人ぐらい子どもがほしいか」ときいた調査結果である。

「もう、いらぬ」と答えた人が、昭和二五年二九・八% 三十四年四二・七% 三十六年六四・二% 四十年七〇・五%である。

以上のデータから、世はまさに核家族、子ども二人限度が理想家族計画像のようである。風潮とよんでよいゆえんである。

○この風潮への批判

(1) 核家族は近代的である。

経済力、労働力が許せば、夫婦中心の核家族が願わしい。やがて子どもも成長すれば独立していくので、家族構成の一期は夫婦のみ、二期親子同居、三期は再び夫婦だけに戻るというのが理想であろう。三世代家族による老人の経験の知恵による直接の教育など貴重なものが失われはするが、それにもまして、世代による経済処理の問題、人生観、処世観の相違、すなわち世代のちがいがいのエネルギーのむだづかいは大きい。そのことを計算すると近代的家庭生活はやはり核家族が理想ということになろう。

(2) 人間接触の少ない欠陥がある。

ボッサードは人間関係の公式を示している。 $X \parallel \frac{Y}{Z} \cdot Y$ がそれである。Xは相互関係数であるし、Yは人数である。

①兄妹の相互鍛練が少ない。

一人っ子では話にならないが、二人っ子でもXは1である。すなわち兄妹関係は単純な一組に限定されてしまう。もし三人ならどうだろう。Xは3となる。子どもが一人ふえることによって一人一人の子どもの接触は倍になり全体では三倍になるわけである。(両親を交えると一人っ子でXは3、二人っ子で6、三人っ

子となると10になる。)

このことは、あだやおろそかで考えてはならない重大事である。すなわち量が質をかえるポイントがこの二人兄妹から三人兄妹の間にあるからである。

一人っ子がよく問題になり、わがまま、独断、独走、依存性などとりあげられて、学校教育のなかで特に留意しなければいけないことになっているが、二人っ子的場合だつて実は相互関係の数字で一端がうかがえるように一人っ子と五十歩百歩といつてよい。

何でもいあいえる仲、共通の生活基盤に立つてはだで接しあえる仲、こんな良い条件の人間接触は他に求めがたい。それが兄妹なのである。そんないい機会を親の家族設計で二人にしてしまうのは理知にたけた近代的な計算高い最近の親にしてはまことに現実主義の裏側の「手ぬかりの穴」だといいたい。何としても子どもは最低三人はほしいものである。

(3) 過保護に陥りやすい。

一人ないし二人の子どもを設計する多くの親は少数精鋭主義に立っている。自分たちの経済力も考慮に入れているだろう。なかには母親の容色のことも、また育てる苦勞も大きく考慮点に入っているかもしれない。しかしなんといつても「いい子」をねらっている。これが基になって、自分では「雑草の如くバイタリテイ

ーのある子」と思つていても現実には「風邪らしいわ、学校休ませなくては……」と安全、用心第一となりやすく貴重品扱いになって過保護に陥つていくのが常道である。稀少価値の然らしめる当然の帰結といつてよい。

過保護の裏側は過大期待である。「この子だけだから」の期待は子どもの小さい肩に重くかかつていく。成績に一喜一憂するのも少数子の母親に多い。かけがえのない子に期待する心持はわかるがその重荷を意識して生きなければならない子どもはのびのび育つはずがない。

この批判の結論も「子どもは三人以上」である。

(二) マイ・ホーム風潮

核家族は昭和三十年を境に上昇している。(戦前及び昭和二十八年は平均世帯人員五人だが三十年頃からへりはじめ四十一年は三・六八人である。)それにつれて独立した家屋を持つ人が多くなり、いわゆるマイ・ホーム的風潮が世の注目をあび脚光をあびてきた。「小さいながらも楽しいわが家」的小市民的心理状況は、戦後の何もかも不足の欲求不満が「何とか、小型でも」に発現したのであろう。

○ この風潮への批判

(1) 一度は通る道である。

マイ・ホーム主義に対して戦後教育のなかで個人主義が間違っ
て利己主義になり、そのあらわれがこれであると指摘する人がい
る。しかし私はその説はとりたくない。マイ・ホーム主義は利己
主義の権化ではないと思う。むしろ渴えた愛情、飢えた物質事情
が一時の反動としての表出であるか、でなければ青年あるいは老
壮年者が心のより所として「わが家」を選んだのであって、戦前
のような放らつた街での遊興に比べればずっと健康であるといえ
る。しかも人生一度は(結婚後)この道を通るのが願わしいとまで
思っている。

(2) かくれ家であつてはいけない。

ビジョンを持たない近視眼的現状脱却の道にマイ・ホームを選
ぶ親もいないではない。この点はいましめたい。すなわち、社会秩
序がある程度整ってきたので、「自分の社会的位置」の見通しの先
取りをして、「わが家中心しごととは次」に逃げこむむきもないで
はない。これは社会・国家にとつて大きな損失で小市民的とよばれ
てもしかたない。こんな因循で姑息な心持でわが家を大切に
しては、おそらく子どもも健全に雄こんに育つていかないであろ
う。「雑草のようなバイタリティーのある子」などとても期待で

耐久消費料普及率(%)

	日 本	フランス	西ドイツ
テ レ ビ	96.7	46.3	34.4
電 気 冷 蔵 庫	76.9	65.1	51.8
電 気 洗 濯 機	81.3	43.2	33.9
電 気 掃 除 機	56.1	56.6	64.7
調 査 年	1967	1966	1964

入れればたちまちその団地内の子どものある家に売り広がるから
だといわれている。

右の表をみて、気がつくことは、電気掃除機のみ日本の普及率
が悪く、他は圧倒的に多いことである。じゅうたん畳というハ
ンディもあろうが、とにかく家庭外に目だつ品物の普及度が高い
ことが指摘できる。

前のセールスマンはいふ「ピアノは音が出ますからあるかない
かはすぐにはつきりと隣近所にわかるんです」と。

ルース・ベネディクトの「菊と刀」にもこの種の日本民族の持
つ性格がかかれている。

きないし、小心翼翼型の社会的に
存在価値のうすい子どもしか育た
ないであろう。

社会的しごととわが家のバラ
ンスのとれた生きかた、それこそが
こうした親たちに願わしい心境の
変化の方向である。

(三) 社会的同調の風潮

ピアノのセールスマンは「団地
の一軒」をねらうという。一軒に

どうも日本人は、ひとのことが気にかかる、民族であるらしい。戦後の教育で個人主義が批判されるが、とてどもとてまだまだ個性尊重の教育は不足のようである。

この風潮はよきにつけ、あしきにつけさまさまの絵模様をおりなして親の風潮をつくっている。入試問題、消費問題等々多くの問題の底にこの性格の流れていることを忘れるわけにはいかな

○ この風潮への批判

多言は要しない。「身から出たきび」という格言を持っている日本民族である。親たるもの「おのが個性」「わが子の個性」を大いに尊重することだと思ふ。

「自我に目覚める」ことこそ、すなわちわが眼でみ、わが耳で聞き、わが身で考えることこそ基本である。そして全ての判断、全ての行為、行動の源「自我」を求める態度こそ近代人の最重要の資質である。

(四) 消費時代への埋没風潮

「落しもの時代から忘れもの時代へ」「ケシゴム時代からジャンパー時代へ」これは私が名づけた小学校の子どもの遺留品へのだじゃれである。

セーター、ジャンパーが落しものとして数多く職員室の箱に

められている。朝会で展示しても落し主は出ない。特売場で買ったのか親も子どももおのが衣服に記憶関心がうすいようである。

戦後の無い時代の反動は「いつかつかうだろう」「安いわね」で無計画に入手されている。

すでに「物」は機能の位置を捨て、「ねだん」におきかえられている。まさに大量消費時代といつてよい。

○ この風潮への批判

(1) 子どもはおとなではない。

こんな時代に少年期を送る子どもがかわいそうでならない。少年時代は人類発達史からみても原始時代、物が少ないなかでのおおくの抵抗と戦いながら自らを訓練しつつ生長をつづけるのが適切で子どもの本来の心にあうことである。

それなのに、ふんだんに与える「商品化物資」は子どもを墮落させている。「物の生命は機能にあってねだんではない」ことを身をもって知る最適期にこの世の風潮はまことに逆である。

豊かな生活は親だけでよい。子どもは貧しい生活に耐えることに生命をかけるべきである。そこに子どもは成長の芽を発見する。むやみに金を与えないこと、物を買ってやらないこと、これこそが昭和元禄時代に生きる買親の心でありたい。

(4) 「お手つだいより勉強」の風潮

主婦の家事労働時間は昭和十六年で十時間三十四分、四十年は六時間五十九分とある調査は示している。この七時間近い労働の内容もさいきんは軽労働になっている。したがって家事労働時間の余裕はあるいはパートタイムなど外の労働にふり向けられる傾向もみえる。が、なおかつ多くの母親はその時間とエネルギーを子どもに向けている。

現状はこの時間的労働的余裕を持たずか家族員として当然家庭生活で行なうべき責務を持つ子どもの手伝いをさせなったり奪いとったりしている。そしてそれにかわって「勉強」を強いている。そこに狂いがある。多くの子どもが、おかあさんの一ばんきらいなところは問いに「勉強しろ」ということだと答えている。そして多くの母親は「何をしなくてもいいから勉強しろ」というのですが、なかなか」という。

入試問題、少数子問題をつかまえてこの親子論争はここ日本の家庭の一つの典型的風潮になっている。

○ この風潮への批判

(1) 子どもは「遊び」で育つ。

子どもの遊びというのはおとなのレクリエーションやレジャー

とは質的に内容がちがう。子どもは自己試練的学習を「遊び」という複合形態に求める。遊びには観察、試行、判断、決断、意志力強化などの能力はもとより兄妹友人との人間交渉による集団参加の能力など幼少年期に絶対必要な教育内容がたくさん入っている。しかもそれは強いられた形でなく求める姿勢で行なわれる。子どもにとってこんな絶好な成長の機会はない。逃がしたら償いきかない大事な機会である。

ところが母親は「学校学習」を強く求める。系統的な学校学習と散発的ではあるが経験学習として有効な遊び、このバランスこそ子どもの好ましい生長の両輪といえる。「雑草のようなバイタリティーのある子」は遊びで育つ。

肉食を強いて野菜を食わせない母親は「人間生長の原理に無知」のそしりをまぬかれまい。

(2) てつだいは責任を教える。

人間は社会的動物といわれる。そのもつともはじめの姿は家庭集団である。この基礎の場と時にその一員としての責任を最も具體的な「てつだい」の形でやらせることはやがて成長の後の集団参加の基礎づけでもある。

「強勉の前におてつだい」これをモットーに子どもを育てたい。

(白梅短期大学)